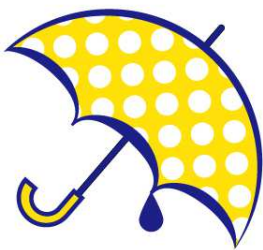


いそファミ通信

6月号



6月になって随分蒸し暑くなってきましたね。

これからの時期、どうしても避けられないのが皮膚のトラブル。

今回は暑くなるとなりやすい皮膚の病気についてです。

「あせも」はなぜなる？

かゆみを伴う小さな赤いブツブツができるあせも。乳幼児によくみられますが、汗をたくさんかくこれからの季節は大人でも油断はできません。掻き壊して化膿したりすると治りにくくなることもあるので、ほかの湿疹・皮膚炎と同じように早期に適切な治療を行うことが大切です。

あせもができるのは、大量に汗をかいたときに、汗が皮膚の中にたまってしまふことが原因です。

たまった汗は、皮膚の下にある汗管の周りの組織に漏れ出し、水ぶくれが生じたり、炎症を起こして、かゆみを伴う赤いブツブツができたりします。そのためあせもは「汗疹(かんしん)」と呼ばれます。

また、一般的に大人よりも乳幼児にあせもができやすいのには理由があります。実は汗腺の数というのは大人も乳幼児もほぼ同じ。つまり、乳幼児の場合は小さな面積に汗腺が密集しているため汗をたくさんかくのです。乳幼児は、汗を拭いたり、汗をかいたら着替えたりするなど、自分でスキンケアをすることができません。そのためお母さんがきめ細かくみてあげることがとても大切になるのです。

小児ストロフルス

生後数か月から1~2才頃の小児に特有な、虫さされが原因でおこる皮膚の過敏症です。虫に刺されたところが赤くふくらみ、強いかゆみがあります。水疱ができ、やがて褐色の小さなシコリが残ります。治療は抗アレルギー剤が主ですが、二次性細菌感染予防のために抗生物質が処方されることもあります。

とびひ(伝染性膿痂疹)

あせも、虫刺され、湿疹などをひっかいたり、転んでできた傷に二次感染を起してできる皮膚の感染症です。とびひには、水疱(みずぶくれ)ができて、びらんをつくることが多い水疱性膿痂疹と、炎症が強く、痂皮(かさぶた)が厚く付いた痂皮性膿痂疹があります。治療は抗生物質の入った軟膏と抗生物質の内服薬を併用し、原因菌を退治します。また、他への感染を防ぐためにガーゼで患部を覆うことが大切です。

夏の日焼けはやけどと一緒に！

日焼けはいわば、やけどの一種。紫外線によってダメージを受けた部分は、発熱やほてりといった炎症を起こします。皮膚に過度な刺激を与えず、とにかく冷やす事が重要です。

ミネラルウォーターなど水分補給をしっかり行い、内側からのケアもきちんとしましょう。初動が大切ですから、早めのケアをオススメします。

水ぶくれや皮がベロベロに剥けるような中度以上の日焼けの場合は、一刻も早く医師に相談してください。



お知らせ

一宮市では、10月末日まで住民検診を行っています。

当院では胃癌検診については予約検査となっております。毎年10月に予約が集中し、そのために胃癌検診が受けられなかった、ということもあるようです。早めの予約をおすすめしております。

1年に1回は定期的に検診を受けてみましょう！！



いそむらファミリークリニック